

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 16 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24650375

研究課題名(和文)教育学における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく歴史的検討

研究課題名(英文)The positioning about the education of the physical in pedagogy : The historical examination based on the two concepts (organism / medium) of the term "physical"

研究代表者

中野 浩一 (NAKANO, Koichi)

日本大学・工学部・准教授

研究者番号：40579728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：ペスタロッチの「身体教育」には二つの概念が認められる。一つは身体(生体)の育成を目的とした教育、もう一つは、身体の育成を手段とした、すなわち身体(媒体)を通して精神面(知・徳)の育成を目的とする教育である。このように「身体教育」は、身体的諸力の育成や健康の保持・増進のみならず、知・徳の育成をも担い、知・徳を实践へと向かわせる原動力となっているので、ペスタロッチ教育学において不可欠なものとして位置づけられている。

ヘルバルト教育学では、ペスタロッチの「身体(生体)の教育」という概念は否定されているが、「身体(媒体)を通じた精神面の教育」の方は教育の完成上、不可欠なものとして位置づけられている。

研究成果の概要(英文)：In the term "physical education" of Pestalozzi, two concepts were recognized. The one was the education aiming at cultivating of the physical(organism), the other one was the education by means of the cultivating of the body, namely through the physical (medium), for the cultivation of the mental (intellectual and moral) site. Thus the term "physical education" was not only cultivation of physical powers, maintenance and improvement of the health, but also the educational means to cultivate the intelligence and the morality in learner's mind, and becoming the motive force which introduce the intellectual and moral activity into practice, so that it was positioned as an indispensable category in Pestalozzi's pedagogy.

In the Herbart pedagogy, although the concept "education of the physical (organism)" in Pestalozzi is denied, but the concept "education through the physical (medium) for the mental site" is positioned as an indispensable thing on educational completion.

研究分野：身体教育

キーワード：身体教育 言葉と概念 ペスタロッチ ヘルバルト 高嶺秀夫 能勢栄

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 教育学における**身体教育**の位置づけを歴史的に検討した研究はこれまで行われていない。この理由は、今日、体育学という専門分野が存在するので、教育学におけるその位置づけに関心が及ばなかったためと思われる。しかし、教育学とは本来、教育全般のことを包括する学問分野のはずである。そこで、最初の試みとして、日本における教育学書を年代順に比較・検討し、教育学で**身体教育**の分野がいつ頃まで位置づけられ、どのように欠落していくのかを明らかにした。

その成果が、中野浩一「教育学における『体育』の扱われ方の変遷とその理由」(修士論文)である。これにより、明治初期の日本では英国や米国の教育学説が一般的で、知育・徳育・体育の三つを掲げるペスタロッチ主義に基づき、**身体教育**が教育学の一領域として位置づけられていたこと、明治20年代には、憲法と同様、学問もドイツ化が進み、教育学ではヘルバルト主義が紹介され、ペスタロッチ主義が衰退すること、ヘルバルト主義では教育目的を道徳的品性の陶冶、すなわち精神教育に限定し、**身体教育**を否定すること、このため、「体育」は医学の範疇とされ、教育学から除外されることが明らかとなった。

(2) また、体育史の先行研究(例えば、木下秀明『日本体育史研究序説』など)では、**身体教育**の概念規定を「身体のための教育」としているが、この点が身体面に偏っており、歴史的事実を反映していないことも明らかとなった。なぜなら、ペスタロッチ主義では、**身体教育**において、「身体」そのものの育成のみならず、「身体」を通して精神面の育成をも目的としているからである。前者が生体の変化を、後者が他者との媒体を意味しており、言葉上では同じ「身体」であるが、両者の概念は異なるのである。

本研究では、新たな試みとして、それらの概念に基づき、生体と媒体とを意味する二つの「身体」に着目して、**身体教育**と教育学との関係を歴史的に検討する。

## 2. 研究の目的

今日、教育学において**身体教育**が語られることはまれである。これは、**身体教育**に関する専門分野として、体育学が存在するように、**身体教育**は、教育学の範疇ではなく、別分野に位置づけられているからである。

しかし、**身体教育**は、明治時代初期、教育学の学問領域に位置づけられていた。当時の教育学書は知育・徳育・体育の三領域に区分され、「体育」において**身体教育**が述べられている。

**身体教育**は教育の一領域なのに、なぜ教育学と区別されている(しまった)のか。

本研究は、二つの「身体」(生体・媒体)という概念の相違に着目して、**身体教育**と教育学との関係を歴史的に検討し、過去との位置づけの相違と今日の問題点を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) まず、日本のペスタロッチ主義(知・徳・体)の源流である、スイスのペスタロッチ(Pestalozzi, J.H., 1746-1827)を取り上げ、彼の教育学における**身体教育**の位置づけを検討する。

このため、第一にペスタロッチの主著である1801年の"Wie Gertrud ihre Kinder lehrt"において、彼がどのように**身体教育**を位置づけたのかを検討する。

第二に、ペスタロッチの**身体教育**を検討する場合、1807年の"Über Körperbildung als Einleitung auf den Versuch einer Elementargymnastik, in einer Reihenfolge körperlicher Übungen"の検討が不可欠である。本論については、これまで主に運動面に関する考察が一般的であり、衛生面など、その他の側面が取り上げられることはまれであった。この資料を用い、彼の「**身体教育**」に認められる概念の独自性について検討する。

(2) 次に、日本のヘルバルト主義の源流であり、ペスタロッチから教育学を学んでいるドイツのヘルバルト(Herbart, J.F., 1776-1841)の教育学について検討する。

ヘルバルトは、教育目的を道徳的品性の陶冶、すなわち精神面に限定し、自身の教育学から「体育」を除外した人物として知られている。除外した理由については、身体の発育・発達が発育的に規定されており、身体には「陶冶可能性」を認めなかったためであると、先行研究(例えば、是常正美『ヘルバルト教育学の研究』など)で明らかにされている。したがって、ヘルバルト教育学において、**身体教育**の位置づけを検討することは、無意味のこのように思われる。

しかし、ヘルバルトが教えを受けたペスタロッチは、前述のように、教育を知・徳・体の三つに区分し、**身体教育**を教育学の一領域として明確に位置づけている。さらに、**身体教育**では、身体の育成を通して、知・徳の育成も企図されている。この知・徳の育成をも企図する**身体教育**を無視して、ヘルバルトは教育学を体系化することが可能だったとは考えづらい。

そこで、ヘルバルト教育学の構造を検討し、ペスタロッチ教育学における**身体教育**の影響について検討する。

(3) 明治維新以降、日本は欧化政策に基づき、欧米の教育学説を導入する。明治初期には、英米で主流だったペスタロッチ主義が日本に紹介される。先行研究ではペスタロッチ主義に関し、二つの「身体」(生体・媒体)という観点から**身体教育**を検討したものが存在しないため、この点の検討を行う。この際、ペスタロッチ教育学のこういった点が受け継がれ、また、変化しているのかを検討する。

(4) 日本では明治20年代にヘルバルト主義が主流となる。このヘルバルト主義に関しても、先行研究では二つの「身体」(生体・媒

体)という観点から**身体教育**を検討したものが存在しない。そこで、その点の検討と、ヘルバルト教育学のどういった点が受け継がれ、また、変化しているのかを検討する。

#### 4. 研究成果

##### 研究の主な成果

(1) ペスタロッチの教育学では、教育が "intellectuelle Elementarbildung"・"sittliche Elementarbildung"・"physische Elementarbildung" (以下、「知性教育」「徳性教育」「身体教育」)の三つに区分されている。これら教育区分には、二つの原則が認められる。一つは、知・徳・体の育成を**目的**とする**原則**(目的の原則)であり、もう一つは、知・徳・体の育成**手段**を用いて、他の領域を育成する**原則**(手段の原則)である。この二つの原則より、「直観のABC」などの「知性教育」を行う中で、直感力の育成と平行して、描画による「手先の熟練」など、生体的身体の育成も平行して企図されている。つまり、「知性教育」には、生体的身体の育成を目的とした教育という概念も認められるのである。

「**身体教育**」でも、生体的身体を育成の対象とする**目的の原則**と、**手段**として**媒体**的身体を用いる(もしくは、身体を通して行う)手段の原則とが認められる。このため、「**身体教育**」の概念には、目的の原則に基づく、**身体**の育成を**目的**とした**教育**(以下、**身体(目的)教育**と略す)と、手段の原則に基づく、**身体**の育成を**手段**とした(もしくは、身体を通しての)知・徳の**教育**(以下、**身体(手段)教育**と略す)という概念が認められる。つまり、言葉上は同じ「**身体教育**」でも、二つの概念が存在するという独自性を知らずに検討すると、ペスタロッチが**目的**と**手段**とを区別しておらず、知・徳・体を混同していると誤認してしまうのである。

「**身体教育**」においては、教育手段として、衣食住の衛生法と五官(感覚器官)と身体技能が取り上げられている。そして、それらの手段は、職業の専門教育としてではなく、一般教育として位置づけられている。例えば、身体技能に関しては、今日のスポーツに通ずる技能の他、言語・唱歌の発声術、描画術、農事や家事、手工など、日常生活における全ての技能が対象とされている。したがって、今日の「**体育**」が「**運動**を手段とした**教育**」もしくは「**スポーツ**」を意味するので、ペスタロッチの「**身体教育**」よりも**手段**的に狭い概念となっているのである。

「**徳性教育**」でも、目的の原則に基づく徳性の育成の他、手段の原則に基づき、生体的身体の育成も平行して企図されている。したがって、生体的身体の育成に関しては、「**身体教育**」という範疇のみならず、知・徳・体の教育活動全体に位置づけられている。

ペスタロッチが**目的**の原則と**手段**の原則を用いたのは、知・徳・体の三つを結び付け、調和させるためである。調和において、身体

と知性を徳性に従属させたのは、身体と知性を徳性の下位に位置づけたのではなく、愛や信頼という徳性こそが調和の原則にふさわしかったからである。したがって、ペスタロッチは、知・徳・体の三つを鼎立しているのである。すなわち、それぞれ性格の異なる三つを調和させること、もしくは精神(知・徳)と身体との二元論を克服し、一つのものとして調和させることが企図されている。

このように、「**身体教育**」は、身体的諸力の育成や健康の保持・増進と共に、知・徳の育成も担い、また、知・徳を**実践**へと向かわせる**原動力**となっているため、ペスタロッチ教育学の構造上、不可欠なものとして位置づけられているのである。

(2) ヘルバルトの場合、生体的身体に関しては、陶冶(教育)の対象外と考えられている。このため、ペスタロッチで認められた**身体(目的)教育**という概念は否定されている。そして、身体的諸力の育成や健康の保持・増進などは、教育を行う以前の準備段階に位置づけられ、それに「**身体養護**(Körperpflege)」という概念があてはめられ、教育とは区別されている。一方、ヘルバルトは、「**教授**」や「**訓練**」において、身体**の活動**を通じた徳性の習慣化を企図している。すなわち、ペスタロッチにおける**身体(手段)教育**は、**道徳的品性**の陶冶という教育目的を達成する手段として、ヘルバルト教育学の「**教授**」と「**訓練**」に位置づけられている。

ヘルバルトは、生体的身体が精神に影響を与えることを理解していた。このため、生理学に基づいた「**気質**」の類型化が試みられている。しかし、疲労など、常に**変化**する生理的側面を固定的な気質に類型化しても、必ずしもあてはまるとは限らない。このような生体的身体の合理化により、子どもへの理解は、ペスタロッチ教育学に比べると減少しているといえる。また、教育の全てを精神面から検討する場合、生体的身体からの影響を無視しているため、理解しきれない部分を残すことになる。

しかし、生体的身体の育成を担うペスタロッチ教育学に比べると、ヘルバルト教育学による**身体(目的)教育**の除外は、教育者の役割を軽減し、合理的である。この点は、学校衛生制度の導入を促進し、今日の学校教育において、保健室や給食室や親に役割が分担されるなど、役立っている。また、四段教授法の「**方法**」や「**訓練**」に**身体(手段)教育**を位置づけ、教育の完成を企図している点は、ヘルバルト教育学の継承者を経て、日本を含む各国に紹介され、影響を与えている。

以上のように、ヘルバルト教育学では、「**身体教育**」という言葉は用いられておらず、ペスタロッチにおける**身体(目的)教育**という概念は否定されている。しかし、**身体(手段)教育**という概念は教育の完成上、不可欠なものとして位置づけられているのである。

(3) 明治維新後、日本では知・徳・体のペ

スタロッチ主義(三育説)が普及する。特に、教員養成の中心的役割を担う東京師範学校で講義されていた教育学は、ジョホノット (Johannot, J., 1823-1888) の教育学であり、米国のペスタロッチ主義に基づく。この教育学は、1878 (明治 11) 年、米国から帰国した高嶺秀夫 (1854-1910、嘉永 7 - 明治 43) によって普及した。そのジョホノットの教育学書を高嶺が翻訳した『教育新論』(明治 18-19 年刊) では、ペスタロッチにおける二つの「身体」(生体・媒体) が反映された内容となっている。このため、『教育新論』の「体育」には、**身体(目的)教育**と**身体(手段)教育**との二つの概念が認められる。つまり、高嶺が東京師範学校で述べた「体育」は、身体的諸力の育成や健康の保持・増進と共に、精神面の育成をも担い、また、精神面を活性化し、実践へと向かわせる基礎を築いているのである。

したがって、ペスタロッチ主義における「体育」は、今日のような教科目の名称ではなく、全ての教育者に関わる教育理念として、教育学に位置づけられており、教育学の構造上、不可欠なものである。すなわち、三育と称されるペスタロッチ主義の時代には、全教員が「体育」の担い手として考えられているのである。また、「体育」は、衣食住の衛生や休息など、非運動的な手段が多く、運動も健康目的に適した運動に限られている。

今日の「体育」に基づいてペスタロッチ主義を検討すると、以上の点は見過ごされてしまうのである。

(4) 日本におけるヘルバルト主義を検討する際、不可欠な人物は能勢栄 (1852-1895、嘉永 5 - 明治 28) である。能勢は、明治 10 年代後半から明治 20 年代にかけて教育学書を複数出版しており、当時における欧米教育学説に精通していた人物の一人である。このため、ペスタロッチ主義とヘルバルト主義の両方に関する教育学書があり、それらの比較から、身体教育に関する扱い方の変遷が明らかとなる。

まず、『通信教授 教育学』(明治 19 年刊) では、教育が知・徳・体に区分され、**身体(目的)教育**を意味する「体育」が認められる。しかし、**身体(手段)教育**という概念は認められない。この理由は、能勢が知・徳と身体とを明確に分離し、身体の影響を知・徳に及ばないようにしたためである。このため、能勢は、真の教育目的を「智育」とし、「体育」を「智育」の下位とし、教育の初期段階に位置づけた。これにより、**身体教育**に関しては教育の初期段階で終了し、その影響が知・徳に及ばないのである。この点については、ベイン (Bain, A., 1818-1903) の教育学の影響に基づく。ベインは、教育上、“physical education” を必要と述べているが、学問上では、それを教育学の範疇とは考えていない。この点は、ベインがヘルバルトの学説に精通していることから、ヘルバルト教育学の影響によると考えられる。

そして、能勢が「体育」を教育の初期段階に位置づけたことは、明治 20 年代に紹介されるヘルバルト主義への移行を容易にしたと考えられる。なぜなら、ペスタロッチ主義では知・徳・体の三つが鼎立しており、軽重の差がないため、「体育」を除外することが困難であるが、「体育」を下位の段階に位置づける場合、「体育」が教育における真の目的から外れるため、除外することが容易になるからである。

次に、『萊因氏教育学』(明治 28 年刊) には、ヘルバルト主義に基づくにもかかわらず、「体育」の項目がある。しかし、ここでの「体育」は、**身体(目的)教育**と**身体(手段)教育**を意味し、**身体(目的)教育**という概念は認められない。すなわち、能勢は、ヘルバルト教育学における**身体教育**の概念を用いるが、それらの概念に「体育」という言葉を当てはめているのである。この点は、先の『通信教授 教育学』の「体育」で、**身体(目的)教育**という概念は認められるが、**身体(手段)教育**という概念は認められないのと真逆となっている。

結局、『通信教授 教育学』で能勢は、従来、知・徳・体と並立していた「体育」を智育の下位とし、教育の初期段階に位置づけた。このことは、知・徳・体のペスタロッチ主義が一般的だった時代に、**身体(目的)教育**という概念を否定するヘルバルト主義の受容を容易にした。さらに、『萊因氏教育学』では、ヘルバルト教育学に基づく**身体教育**の概念に「体育」という言葉を用い、「体育」を不可欠とする世論の意見に沿いながら、ヘルバルト主義への移行を促していることが明らかとなる。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

(1) 本研究は、「身体」を生体的「身体」と媒体的「身体」に区別した。この区別により、ペスタロッチ教育学の「知性教育」「徳性教育」においても、**身体(目的)教育**の概念が認められること、また、「**身体教育**」という言葉を用いないヘルバルト教育学において、**身体(手段)教育**の概念が認められることなど、これまでの歴史研究では行われていない、新たな知見を得られることが明らかとなった。(2) **身体教育**を歴史的に検討すると、その内容は幅広く、多義的な概念であったことが明らかとなった。例えば、今日の**身体教育**では運動やその技術が主な関心事となるが、過去においては、衣食住の衛生もその手段と考えられていた。したがって、今日、盛んに主張されている「食育」も**身体教育**に含まれるのである。運動に関しては、視聴覚などの五感の訓練、手工や農作業などの技術、描画などの美術、唱歌などの発声術 ... など、資料を探求するたびに新たな発見があった。

今後も、幅広く、多義的な過去の**身体教育**の発掘に挑戦していきたい。

(3) 今日の「体育」が運動(特に、スポー

ツ)を通しての教育を意味するので、過去の**身体教育**よりも手段的に狭い概念となっている。つまり、過去における**身体教育**は、今日の「体育」のような教科目の名称ではなく、全ての教育者に関わる教育理念として、教育学に位置づけられており、教育学の構造上、不可欠なものであった。すなわち、ペスタロッチの場合、全教員が「体育」の担い手として考えられていることが明らかとなった。

(4) ヘルバルトは、**身体教育**を否定し、身体問題を医学の範疇とするため、「**身体教育**」という言葉を用いていない。日本のヘルバルト主義でも、健康な子供を前提にして、精神面の育成を論じていく。教科目で体操の必要性にも触れられているが、集団訓練による社会性の育成が目的であり、身体面の育成には言及されていない。それにもかかわらず、日本のヘルバルト主義者の中には、「体育」という言葉を用いる場合が認められる。

したがって、「体育」という言葉の下に運動が行われていても、身体面が無視され、精神面だけを対象としている場合が認められるのである。

しかし、子供が泣いている場合、心が痛むのか、体が痛むのか、心身両面からの考察が欠かせない。精神面だけに注目すると、問題を解決できない場合が生じることとなる。

結局、ヘルバルトの場合、身体問題は医者などの専門家にまかすべきとするが、子供が自らの身体を気遣う習慣の形成なしでは、同じことの繰り返しである。また、保健室などを設置できる学校教育には適応するが、一般的な教育に比べて、狭く偏った専門家を理想としていることが明らかとなった。

(5) 以上のように、教育学における**身体教育**の位置づけを歴史的に見ると、身体面が合理化され、精神面に力点が置かれるように変遷していることが明らかとなった。そして、今日、学校教員では対応しきれない問題を心理の専門家であるカウンセラーに任せるなど、教育のさらなる合理化が進んでいる。また、近代科学が発展し、バーチャルリアリティの技術開発も盛んである。こういった現状に対し、本研究は、合理化によって見過ごされている点があること、このため、問題を解決できない場合が生じること、その解決の糸口として、生体的身体の育成や媒体的身体のつながりを通して教育が重要であることを指摘できたと考えられる。

#### 今後の展望

(1) 本研究は、ペスタロッチとヘルバルトの**身体教育**に関し、既製の翻訳書に頼らず、原書からの検討を試みた。この理由は、二つの「身体」(生体・媒体)という観点に基づく翻訳書が存在しなかったためである。しかし、両者の翻訳は困難を極め、研究期間のほとんどを費やしてしまった。このため、両者以外の検討は、ごく一部に限られてしまった。今後は、検討者数を増やし、世界における両者

の影響を幅広く明らかにしていきたい。

(2) 本研究は、二つの「身体」(生体・媒体)という、言葉と概念に着目した点で特色を有する。今後、その「身体」が一般化する以前の過程について、デカルト(Descartes, R., 1596-1650)の心身二元論に着目し、明らかにしていきたい。

(3) ペスタロッチとヘルバルトの理論は、日本へ紹介されるまでに変容されている。そこで、それらの学説が欧米各国を経て日本に伝わるまでの変遷を明らかにしたい。

(4) 初代文部大臣の森有礼による「兵式体操」の導入は、先行研究において目新しいものがなかったと評価されている。しかし、彼の兵式体操論は、日本における**身体教育**の位置づけを変える、重要な役割を果たしているため、この点も付け加えたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

中野浩一、高嶺秀夫(会津出身)の『教育新論』(明治 18-19 年刊)における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく検討、日本大学工学部紀要、査読有、第 56 巻第 1 号、平成 26(2014)年 9 月、pp. 23-34

[学会発表](計 4 件)

中野浩一、能勢栄(福島県師範学校長)のヘルバルト主義教育学における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく検討、平成 25 年度(第 56 回)日本大学工学部学術研究報告会、平成 25(2013)年 12 月 14 日、日本大学工学部(福島県郡山市)

中野浩一、ヘルバルト教育学における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく検討、日本教育学会第 72 回大会、平成 25(2013)年 8 月 29 日、一橋大学(東京都)

中野浩一、能勢栄(福島県師範学校長)の『通信教授 教育学』(明治 19 年刊)における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく検討、平成 24 年度(第 55 回)日本大学工学部学術研究報告会、平成 24(2012)年 12 月 1 日、日本大学工学部(福島県郡山市)

中野浩一、ペスタロッチ教育学における身体教育の位置づけ：二つの「身体」(生体・媒体)に基づく検討、教育史学会第 56 回大会、平成 24(2012)年 9 月 23 日、お茶の水大学(東京都)

[図書](計 0 件)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 浩一(NAKANO, Koichi)

日本大学・工学部・総合教育・准教授

研究者番号：40579728